

---

# LYCEEっと！(リセット！)

あと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

LYCEEつと！（リセット！）

### 【Nコード】

N0086N

### 【作者名】

あると

### 【あらすじ】

入学2日目にして学校を辞めたいと思っている少年に、見た目と裏腹に土日は引きこもりな少女。そんな後輩を楽しく傍観している先輩達と、毎週無茶苦茶な無理難題を突き付ける男性教師。

人付き合いの苦手な生徒達が織り成す学園ストーリーの幕開けです！

## 高校デビュー？それおいしいの？

こんなこと入学式の翌日に言うべきじゃないかもしれない。  
しかし、敢えて口にして言いたい。

「この学校辞めてえ……」

そう思っているのは俺だけじゃなく、クラス全員が、いや、学年全員がそう思っているのだろう。

だって、俺達はお互い話したワケじゃないが、似た者同士なんだから。

正直、入学案内のパンフレットを見て、この高校を受験すると即決していた。

何せ、新設の私学校。こんな田舎にあるにもかかわらず、校内のどこもかしこも都会的。

（都会の学校がどうなのかはイメージに過ぎないが）

全室エアコン完備で、教室は最新のPCが人数分、広い校内を巡回する定期バスもある。

更に学食はお手頃価格に加えて、ファミレス並のメニュー数。

俺が電車で1時間半も掛けてこの学校に通おうとするのも納得だろう？

多分、同じような理由でこの<sup>かなでがおか</sup>奏ヶ丘高校を選んだ奴もきつというだろう。

しかしそれは表面上の理由らしい。それを今朝の<sup>ホームルーム</sup>HRで担任から知らされた。

というか、俺が早くも新生活に挫折しているのはその担任のせいだった。

「お前ら、周りを見て何か気付かないか？」

担任の言っていることが分からず、静かな教室は更に静寂に包まれる。

「あゝ、やっぱ入学して2日目じゃダメかあ。まあ、お前らじゃそうだよなあ」

頭をポリポリ掻きながら、30歳前後の男性教師は仕方がなさそうに答える。

たった一言だったが、それが「全て」だった。

電車に揺られて降りた川澄坂<sup>かわすみざか</sup>から、少年が学校へ向かう途中。

朝のラッシュ時だというのに、少年がすれ違う人の数は決して多くなかった。

メインストリートと思わしき道に面した店もまだシャッターは半開き状態で、朝の慌ただしさを感じさせない。

奏ヶ丘高校は駅から歩いて10数分のところにある。

昔から川澄坂に住んでいたとある有力者が、5年ほど前に自分の孫娘のために作った学校：と言われているが真偽は定かではない。

敷地の広さは大学のキャンパス並で、敷地の中心には5階建ての建物6棟ある。

それらは「リジョン」と呼ばれており、

リジョン1…1年生教室棟

リジョン2…2年生教室棟

リジョン3…3年生教室棟

リジョン4…体育棟

リジョン5…学校生活棟

リジョン6…職員研究棟

とされている。

基本的に体育以外の科目は1つのリジョン内で受けることが可能で、体育の際はリジョン4にて行う。

リジョン5には、学食やライブラリ、進路相談室などの学生サポートを目的とした施設があり、

リジョン6は教師が利用する施設だ。

敷地の東側には男子寮、西側には女子寮があり、全校生徒の3割程の遠方組はここで生活している。

文原<sup>ふみはら</sup>葉瑠は正門をくぐりリジョン1へ向かった。

まだ始業まで20分あるせいか、棟内は静かだ。

（明日は一本遅い電車でもいいかなあ）

教室までの階段を上りながら、葉瑠は携帯に登録していたアラームの時間を変えた。

「お、ここだっ」

入口に“1年7組”と表記されている部屋の扉をスライドして、教室内に入った。

（おっ、もう結構来ているなあ）

30人編成のクラス内は既に半分近くの生徒が登校しており、各々の席に着いていた。

葉瑠も教室後ろのロッカーに鞆を置き、自分の席に腰を下ろした。そして、徐に携帯を操作し出した。

「……」

携帯でニュースサイトを開き、ぼーっと液晶を眺める。

「……」

特に目を惹くトピックスもないのか、一旦は携帯を閉じたが、

ほどなくして携帯をまた開いてサイトに接続する。

「……」

周りのクラスメイトも男女問わず、携帯か雑誌、ゲームに焦点を合わせて、各自の世界に耽っている。

「……」

キンコンカーンコン…

始業のチャイムが鳴り響くと同時にスーツ姿の男性が入ってきた。既に生徒は全員登校済みのようだ。

「うん、皆揃っているな？よしよし」

教壇の前に立つ男性、このクラスの担任は上機嫌そうだった。

「みんな、おはよう。昨日も紹介したけど、俺がこのクラスを1年間受け持つことになった、河原井だ。担当は数学だから、数学でわからないことがあったら何でも聞いてくれ」

担任の河原井は前日の紹介と同じものを述べる。

生徒達は声を発せずに皆、頭を下げた。

「さて、今週は主に授業ガイダンスや入学オリエンテーションとかで、本格的に授業開始するのは来週からになる」

河原井はそう説明しながら、一番前の席に座る生徒にに行事予定の書かれたプリントを後ろの人数分配布していった。

生徒達は無言でそれに従い、1枚取って、残りを後ろの生徒に渡していく。

葉瑠もプリントが手に渡り残りを後ろに回して、配布物に目を通そうとした。

その時、担任がまた何かを言ってきた。

しかし、先ほどまでの明るさが全面に出ている口調ではなく、

人を小馬鹿にしたような、おちよくったトーンで。

「あゝあ、やっぱりか。残念残念っ」

先ほどまでとは違った河原井の様子に、クラス全員がキョトンとした。

「お前ら、周りを見て何か気付かないか？」

ザワザワすることもなく、教室内は一層の沈黙が包み込んでいく。

「あゝ、やっぱり入学して2日目じゃダメかあ。まあ、お前らじゃそうだなあ」そう言いながら河原井は教壇から一人一人を見渡しながら、ため息をついた。

そして頭を掻きながら、一言述べた。

「お前ら、友達いないだろ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0086n/>

---

LYCEEっと！（リセット！）

2010年10月9日00時30分発行